学長式辞

学びに誇り持ち 堂々とした人生を

佐々木 重人

皆さん、ご卒業おめでとうございます。

学部卒業生が本学に入学した2020年度、新型コロナウイルス感染症が日本中に広まり、皆さんとの初対面の場であったはずの入学式も中止せざるを得ませんでした。その後、キャンパスへの立ち入りも制限され、オンライン授業を実施しました。昨年5月までの3年間、皆さんの行動に制限をかけ続けてしまったことを大変心苦しく思っておりますが、感染防止対策にご協力いただきましたことに深く感謝します。

一方、このコロナ禍での教育を通じ、新たな教育改革の芽を見いだすこともでき、すべての教員が一定水準のスキルを獲得することができました。また、団結して事に当たれば、「不可能」を「可能」に変えることができるということが証明されました。

今年度は大半が対面の授業でしたが、オンライン授業実施体制も維持しています。皆さんが何の苦もなく、オンライン授業に参加している様子を見るとき、今後皆さんは、いわば「オンラインネーティブ」として、デジタルデバイスを自然に操り、自由な発想で新たな価値を産み出すことの得意な世代となることを確信しています。

コロナ禍の渦中にあった3年間を含む大学生活を、今後の人生にいかに位置づけるか自問自答してほしいと思います。少なくともそれは、「失われた3年間」ではなく、むしろ「復元力（レジリエンス）を鍛えた4年間」と捉えてほしいと思います。

建学の精神である「社会に対する報恩奉仕」を現代的にアレンジした21世紀ビジョン「社会知性の開発」とは、皆さんが大学で身につける知識や技能を自分だけのものとして完結させてしまうのではなく、社会の諸課題の解決のために活用すべきというマインドを身につけることを意味しています。

また本学の学風「質実剛健」「誠実力行」は、何事にも自分らしく自然体で、心身を鍛えながら、誠実に人生を歩むという誓いが込められています。ぜひ、本学で学んだことにプライドを持って、堂々と楽しく人生を歩んでください。

今もロシアの軍事侵攻によりウクライナの市民の命が奪われている悲劇に心が痛みます。本学は現在、ウクライナから避難している2人の方に、日本語を学ぶためのお手伝いをしています。最後に、1日も早くウクライナに平和が戻ることを、また能登半島地震の被災地の早期の復興を祈っています。（要旨）

祝 卒業・修了

総長祝辞

社会の中に立ち 光を放とう

日髙 義博

本日晴れて大学を卒業された皆さん、大学院を修了された皆さん、おめでとうございます。

コロナ禍の中で大変な勉学環境であったと思います。自ら切り開いていった皆さん、そして温かく見守っていただいたご家族、保護者の喜びは、本当に表現しえないものがあるかと思います。

大学で勉学したことは、明日、役立つわけではありません。20年、30年後に、大学で修得したものの大きさを実感することになりましょう。厳しい環境に置かれたときに、恩師の言葉が道を開き、あるいは冗談を言い合った友達がそれとなく支えてくれる。そんなふうに、旅立った母校を振り返ることになると思います。

大学は学問をする場であり、知識を修得し、学問の体系を身につけることが学業成績に表れますが、大学の真価はそれだけではありません。在学中、どういう価値観を得て、どういう人生の生き方を選んだのか。その付加価値が極めて大切です。在学中の付加価値を十分に利用して、これから皆さんが歩くそれぞれの道で、自分の立ち位置をきちんと見定め、切り開き、そして後輩のために、社会のために大きく羽ばたいていくことを切に祈ります。

今日の社会情勢、そして自然環境の変化は大変厳しいものがあります。私は、1980年に西ドイツに留学しましたが、ドイツではまだ戦後という感じはしませんでした。NATOのフランス軍の戦車が走る音を聞きながらドイツ語を身につけました。今後の日本社会を背負うのは皆さんです。そして世界の平和を切り開くのも皆さんです。大学で培った価値観を大事にしながら、思う存分、社会に貢献してもらいたいと思います。

「社会知性の開発」「社会に対する報恩奉仕」の「社会」という言葉にはいろんな意味があります。この言葉の一番重要な意味はラテン語の「socius（ソキウス）」という言葉からきています。家族関係も友人関係も社会ですが、この場合の「社会」はもう少し深い意味があり、社会のつながりの中に立って、社会に立つという意味です。この意味こそが重要なのです。社会の中に沈んではいけません。社会の中に立って、人々の信頼を得て、社会に貢献する姿こそ、専修人の姿です。

皆さんは行くべき道を見定めたことでしょうから、これからは社会に立つ人材、信頼を得て仕事のできる人材、そして時には華やかに、時にはひそやかに光を放っていただきたい。それが後輩に対する信号であり、教職員に対する応援のメッセージになります。

皆さんの活躍を期待し、総長の祝辞とします。（要旨）

鳳

揮毫　松尾 治
文学部准教授（書作家）

校歌の一節に「鳳の翼 両手に開き 世に魁けし我等が大学」とあります。

「鳳」は風神を表します。風土、風教、風格など、この世の全てのものが風神によって支配されている神話的背景から誕生した漢字といえます。

未来に羽ばたいてください。

理事長祝辞

世界の変化を飛躍の好機に

松木 健一

卒業生、修了生の皆さん、本日は誠におめでとうございます。ご家族の皆様も大変お喜びのことと存じます。また、能登半島地震によって被災された方々に、衷心よりお見舞いを申し上げます。

専修大学の前身校である「専修学校」は、藩費、国費でアメリカに留学した相馬永胤、田尻稲次郎、目賀田種太郎、駒井重格によって1880（明治13）年、経済学と法律学を日本で初めて組織的に教授する高等教育機関として設立されました。創立者たちは日本語で教育を行うことで、高等教育を広く日本社会に根付かせ、一人でも多くの若者を社会で活躍する有為な人材に育てるという壮大なミッションに取り組もうとしたのです。

今日では、建学の精神「社会に対する報恩奉仕」を、21世紀ビジョン「社会知性（Socio-Intelligence）の開発」として、「学生を基本に据えた大学づくり」を推進しています。

現在、世界は大きく変貌しています。しかしこれは、皆さんにとって飛躍、活躍する好機でもあります。なぜなら、若者の感性は、閉塞感を打ち破り、社会を変革する機動力を持っているからです。その意味で、さまざまな分野に旅立つ皆さんの活躍を大いに期待しています。

「現代経営学」の研究者ドラッカー氏は、「仕事と働くことは別物である。仕事（work）は、顧客の要請によって生まれるものであり、自分とは別の客観的なものである」と私たちに教えています。

「やらなければならない仕事」を「やりがいのある仕事」に変えていくことは、自身の成長につながり、充実した人生を歩む契機となります。受け身で待つのではなく、生きがい、働きがいを見いだし、より充実した良き人生を自らの手で勝ち取る信念を持ってください。

そして、今後の人生で困難に立ち向かう時には、どうか思い出してください。明治という時代に、先端の知識を若者に伝え、高等教育を根付かせようとした創立者たちの気概と、「社会に対する報恩奉仕」という精神を。きっと皆さんに挑戦する勇気を与えてくれます。

皆さんの進む道は異なりますが、堂々と信じる道を歩み、悔いのない人生を送られるよう祈念しています。

これまで多くの方々からいただいた恩を忘れることなく、謙虚に学び続ける姿勢を持ち続け、心豊かな専修人としての人生を歩まれることを切に願います。（要旨）